

[研究ノート]

化粧文化ギャラリーオープン記念トークイベント

女性像から読みとく化粧文化

富澤 洋子／ポーラ文化研究所

登壇者：西原 妙子 富澤 洋子／ポーラ文化研究所 2024年6月22日 P.O.南青山ホール



化粧文化ギャラリーオープン記念トークイベント 女性像から読みとく化粧文化



化粧
文化
ポーラ文化研究所

2024年6月22日 ポーラ文化研究所

1. はじめに 歴史の中の美人とは？ 時代や地域で異なる美の基準

「美」の変遷をたどろうとするとき、文学や美術作品に頼ることが多い。美術全集に掲載された土を焼いた人物像、神話に登場する女神像の彫刻や絵画、王侯貴族の肖像画などは、写真という媒体がない時代には、時代ごとの美意識を知るための有力な手掛かりになる。しかし「化粧文化」で注目したいのは、作家論や様式論ではない。それぞれの時代で、どんな化粧料を使ったどんな化粧・美容行為が流行していたのか、どんな気持ちで化粧をしていたのかという視点で、それらの作品に向き合ったことがあるだろうか。持統天皇の時代に中国大陸からもたらされた白粉の記録、《源氏物語絵巻》に描かれた引目かぎ鼻、浮世絵に表現された花魁の髪型、江戸時代まで続いたお歯黒の習慣は、中国の正史にも登場する。古代から現代まで、いわゆる「美人像」とされる絵画作品を並べてみると、時代や地域で異なる美の基準は豊かにバリエーションに富んでいることがわかる。

日本を例に見てみよう。古墳時代には、正倉院宝物の《烏毛立女屏風》に見られるように朝鮮半島経由で中国大陸風の赤い頬に、蛾眉と呼ばれる弓なりの眉、結い上げた髪型だったものが、平

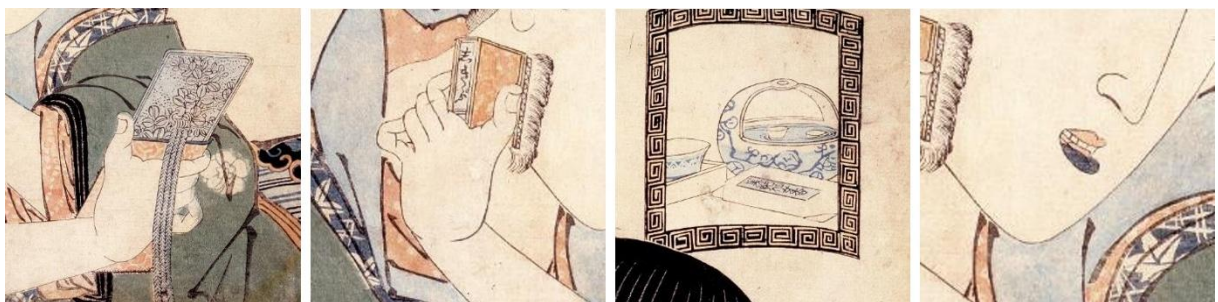
安時代に入ると白い肌、眉剃り、眉作り、身の丈よりも長い垂髪（すいはつ）となる。遣唐使の廃止を背景とした「国風文化」の興隆が理由の一つとされるが、社会的な背景の影響を受けながら、日本独自の美意識が醸成されていったと考えられる。江戸時代には結髪文化が再び花開くが、白粉でベースメイクを行い、紅でポイントメイクを行う化粧法は、この後、明治の文明開化を迎えるまで長く行われていく。明治期以降には欧米の影響を受け、現代の化粧法の基礎が確立された。

2. 読み解くヒント



溪斎英泉《美艶仙女香志きぶ刷毛》文化 12-天保 13 年（1815-1842）（国文学研究資料館撮影）

ここで、ポーラ文化研究所所蔵の浮世絵《美艶仙女香志きぶ刷毛》を例に、化粧文化の視点で実際に読み解いてみたい。



描かれた女性は髪をつぶし島田に結っており、おそらく遊女と考えられる。懐中鏡を手にしてい

ることから、外出先などでの化粧直しの場面を描いたものだろう。左手に持った刷毛で頬から顎へと白粉を伸ばしている。持ち手の部分に「志きぶ」の字が読めることから、この刷毛は上方の「式部刷毛」ブランドである可能性が高い。画面左上のこま絵に目を移すと、「美艷仙女香」と書かれた紙包みが見える。これは白粉包（おしろいつつみ）で、中には粉白粉が入っている。美艷仙女香は寛政頃活躍した歌舞伎の名女形だった瀬川菊之丞の俳名「仙女」にちなんだ白粉で、江戸・京橋南伝馬町三丁目にあった坂本氏が発売していた。最後に口元に注目してみよう。下唇には青緑が配されている。これは笹色紅とって、江戸時代後期の一時期に流行したメイク法である。



三代歌川豊国、歌川国久（こま絵）《江戸名所百人美女 御殿山》安政5年（1858）（国文学研究資料館撮影）

次に化粧の基本である「スキンケア」の様子を描いた浮世絵を見てみよう。湯気の上る金属製の盥（たらい）を前にもろ肌を脱いだ女性が手にしているのは、紅絹で作った袋に糠を入れた当時の洗顔グッズの紅葉袋。紅絹の絹や糠に含まれる成分は肌により影響が期待され、現代でも推奨される湯を使った洗顔が行われていたことがわかる。このように、ポーラ文化研究所では、文学、美術などから化粧行動を探り続けている。



3. 化粧の歴史と3つのイノベーション

ここからは、私たちが日常的に行っている「化粧」という行為が、どのような歴史的発展とイノベーションを経て現在の形に至ったのかを、3つの転換点（イノベーション）を軸に解説する。

3.1 乳化技術

乳化とは水と油など、互いに混ざり合わない液体が、もう一方の液体中に細かい粒子となって分散している状態をいい、乳化状態を安定に保つためには（分離させないためには）界面活性剤などの乳化安定剤が用いられる¹。

古代エジプトなど、乳化の技術が発見される以前の古代の人々は動物性脂肪や植物油をそのまま肌に塗っていた。古代ローマ時代紀元2世紀頃、乳化技術が登場、水と油を混ぜた「コールドクリーム」の原型が生まれた。ヨーロッパでは中世を通じて修道院などが処方をつくり、レシピの形で伝えている。そして19世紀後半の産業革命と科学の進展により、化粧品は錬金術的なものから科学的工業的製品へと進化。日本では明治42年（1909）国産クリームのさきがけの「クレームレート」を平尾賛平商店が発売、「若々しくする美膚料」「無脂肪クリーム誕生」のキャッチコピーで宣伝した²。

3.2 化粧品の安全性

日本、ヨーロッパともに長い間、鉛を原料とした白粉が使用されてきた。日本で化粧が一般化した江戸時代、鉛白粉は価格的に「都市部の一般女性」でも手が届くもので広く普及、先に浮世絵

¹ 竹村功. 乳化. 化粧品と美容の用語事典. あむすく（ベリタス発売）, 2005-3, p.482.

² 「下村薬学博士に依頼せるも成せず、川田工場課長遂にこれを完成せり」平尾賛平商店五十年史. 平尾賛平商店, 1929, p.121.

の読み解きで掲げた浮世絵に描かれた「美艷仙女香」も、鉛白粉だったと考えられる。明治 20 年（1887）、歌舞伎役者・中村福助が鉛白粉による中毒事故を起こし、社会問題化。しかし危険性が指摘されるようになったものの、使用を禁じる法律が施行されたのは昭和 10 年（1935）、50 年近く後のことだった。

3.3 合成香料の誕生

香水はもともと、花や動物由来の希少な天然原料のみを使った、一部の特権階級のものだった。合成香料の開発により、香りの再現・安定供給・新しい香りの創造が可能に。1920 年発売の「シャネル No.5」は、合成香料を用いた革新的香水の象徴とされる。香水は「特別な人のためのもの」から「多くの人の日常」へと広がった。

4. 化粧の意味、現代から未来へ

化粧の目的・役割、「ヒトは何のために化粧をしているのか」ということについて、ポーラ文化研究所では化粧文化の視点から現代の化粧を以下の 4 つに整理してみた。

- | | |
|-----------------|-----------|
| ① 保護 生理的充足 | 肌を守る、ケア |
| ② 識別 社会的充足 | ユニフォーム |
| ③ 自信 精神的充足 | 心のお守り、魔除け |
| ④ 加飾 アイデンティティ表現 | 魅力アップ |

紫外線や外的刺激から身を守るといった「保護」、仲間意識の確認やコミュニティへの帰属意識を高める「識別」、気持ちを切り替えたり精神的に支えたりして背中を押す「自信」、自分らしさやアイデンティティを表現する「加飾」。現代において化粧は、「女らしさ」など他者から押し付けられた価値観から離れ、自分自身の心や感情に向き合うための行為へと変化しつつある。化粧は単なる「よそおい」ではなく、技術・安全・価値観の変化を映す文化そのものであり、今後は「自分らしく生きるためのスイッチ」として、より個人に寄り添う役割を担っていくのではないだろうか。